

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語表現における接続詞の研究 : ポルトガル語との比較を中心に
Author(s)	田代, エリザ温子
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1989 : 89 - 103
Issue Date	1990-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039268
Right	
Relation	



日本語表現における接続詞の研究

－ポルトガル語との比較を中心に－

田代エリザ温子

(I) 日本語の表現と接続

日本語を母国語としない者がこの言語に関するテーマについて文章を綴る場合、思考内容や意見を正しく、明確に書くためにはどのように文を重ね、文と文を如何に関係づけるかという問題に度々ぶつかる。これは、レポートや論文のように意味の通じた、論説的な文章、又は内容を明白に伝えようとする新聞記事のような文章に限らず、叙述的・描写的文体の文章、例えば、小説のようなものを書く時にも生じるのである。小説など文学的なものを外国人が日本語で書く機会はまず稀としても、外国文学の作品を日本語に翻訳することはあろう（翻訳の技術を心得なければならぬとしても、日本語で文章を綴ることになるのでここで一例として上げた）。とにかく母国語ではない日本語で、それも母国語（私の場合はポルトガル語）とは全く異質な言語である日本語での文章表現は難しい。

ここで、私たちの頭の中で構成された思考を文章や談話（本稿では文章のみに限定したい）に形づくられていく過程を考えてみると次のようになるだろう。まず語を日本語の統辞論ルールに従ってまとめる。一つの文にまとまらなければ更に文を重ねていくのだが、この過程で気を配らなければいけないのは、文と文との間の関係づけである。一つの文に思考内容を収められるならば、それが理想的だが、多くの場合、ピリオドを打ち新しい文を設ける。区切りをつけたほうが文章が分かり易くなるという気配りも考慮する。特に、主格の動作、状態を表す語が文の最後に位置する日本語では、一つの文が何行も続くと混乱してしまう。それだけではない。情報量と文の限界の問題もある。これについては、森田良行氏はいう。

「ところで、ここで問題になるのが一つある。それは、なぜそのより大きな一まとまり（段落や章、もしくは文章）を「文」の単位に収めてしまうことができないのか、ということである。これは一つの文に収納し得る情報量の限界の問題と、各情報の組み合わせ様式の多様性が文の構成の枠を越えてしまうという二重の問題に関係している。文章構成のプログラミングは、文の情報収容能力を量的にも質的にも越えるスケールでなされているというわけだ。」（注1－pp.28）

つまり、情報の量が一つの文の収容枠を越えるため、新たに文を作っていくのだが、この作業の際、文と文との区切りで思考内容が混迷しないように、それらを正しく繋いでいくことに考慮しなければならない。これを日本語では文の接続という。

本稿では、この接続の問題を、日本語の接続機能を持つ語にしぼって考え、更に接続表現の形式の一つである接続詞のいくつかの用法を、近代文学の中に例文を求め、調べてみた。

(II) 接続とは何か

国語学大辞典(注2—pp.552)の接続の項では、

「別個に切り離して表現することのできる二つ以上の語・句(文節・連文節)・文・段落(文章)、またはそれ相当の形式によって表現された叙述内容相互間を、同一語句の反復、指示語・接続詞・副詞・接続助詞・活用語(活用連語)の中止法の連用形などの使用によって関係づけ、結び合わせる。また、その表現。」とある。

日本語の接続表現はただ文を重ねるだけでなく、いろいろな語を用いて行なわれるが、次にそれらを用いた例文を上げてみた。

(III) 日本語の接続表現形式のいろいろ

① 反復。この語については前提が必要である。「人々」「日々」のように同一語句の反復ではなく、前文に用いられた語・連語が後文に繰り返される場合をここで扱う。

「これから口を利けなくなるので、三人は、一せいに姦しく喋り溜めをした。喋りためには厨口までそのままつづいた。」(三島由紀夫—『橋づくし』)

「18世紀には、その良識がいわば社会化されて、基本的人権がすべての人間に備わるとされた。基本的人権の中心は、個人の自由である。」(加藤周一—『現代日本私注』)

この二例文では、それぞれ、「喋り溜め」と「基本的人権」が反復語となっており、それらによって、前文に対し、後文の接続が行なわれるが、前件の内容に説明を加える機能が見られる。又、反復は前文の語・連語を強調する役目も担っている。長い文で助詞や連用中止法で綴った情緒的な表現の屈折を打ち切り、句点を打ち、短文にキーワード的な語を反復することで、文章全体にバランスを保っている。

② 指示語による接続表現は、特に英語圏の外国人にとって複雑ではないかと思う。THIS (THESE) が日本語のコ・ソ系に相当し、THAT (THOSE) がア系に相当しており、コとソの区別がないと考えられる。しかし、ポルトガル語には、日本語と同じく、この三ケースが存在する。指示語による接続法は一種の反復でもあるといえる。日本語のそれらの用法はポルトガル語とはあまり異ならないと思うが、ポルトガル語では指示語に性と数があるので前文のどの語又はどの内容を指しているかを知ることは困難ではない。例えば、

"Este (a) livro procura estudar a formação da literatura brasileira como síntese de tendências universalistas e particularistas. Embora elas(b) não ocorram isola-

das, mas se combinem de modo vário a cada passo desde as primeiras manifestações, aquelas(c) parecem dominar nas concepções neoclássicas, estas(d) nas românticas, - o que(e) convida, além de motivos expostos abaixo, a dar realce aos respectivos períodos”(Cândido, Antonio - Formação da Literatura Brasileira) では Este(a) はただの指示代名詞としての機能を担っている(この本)。Concordance のため、「本」と同じく、性は男性、数は単数である。elas(b) は主語代名詞(pronome pessoal) だが、前文の *tendências universalistas e particularistas* を指すことで接続機能もっている。しかし、ここで問題にしたいのは、aquelas(c)と estas(d)である。女性、複数代名詞のこの二つの語は、*tendências universalistas* と (*tendências*) *particularistas* それぞれを指している。日本語でいえば、前者と後者にあたる語だ。aquelas(あれ)と estas(これ)の用法はこれらの代名詞が指す語の配列によるものである。日本語に比べると、ポルトガル語には名詞、形容詞などには性と数があり、それらの活用の多様性から言語そのものが複雑に感じられるが、Concordance は無視できない規則なので、以上のような場合は反対に分かりやすいのではないかと思う。日本語での指示語の接続法はどのように行なわれるか。

「属する宗教の如何をとわず、ケーキ片手に家路に急ぐ亭主どもには、ささやかなツリーとジングルベルのレコードやテレビが待っている。つまりクリスマスは家庭の行事である。これに比べると、除夜の鐘は、日本人の個人の心情につながる行事といえよう。」(梅棹忠夫—『日本人のこころ—文化未来学への試み』)

この例文の指示代名詞「これ」は前文の「クリスマス」を指していることは疑う余地もない。

「渡り者で居住不定の人夫は除外し、土建業者直属の技師とか、技手とか、機械係りとか、現場主任とかいうものを対象にした。これは会社員だから安心だと考えたのである。」(松本清張—『一年半待て』)

この例文では「これ」は前文で「対象にした」内容を指し、その行為の理由を後文で述べている。

③ 副詞も接続機能を持つ。

「階層間の平等については、十九世紀の英国社会での不平等が、政治・経済・教育のあらゆる面で、制度上も実際上も、著しかったことは、いうまでもない。もちろん明治の日本も、高等教育の機会の平等という点を除けば、同時代の英国以上の平等を実現していたわけではない。」(加藤周一—『現代日本私注』)

「もちろん」という語は「基礎日本語2」(注3—pp. 486)では次のように定義されている。

「副詞。その話題や事柄に対して肯定・不否の判断を考慮する余地がなく、判断以前に解答が決まっているの意。」

後文だけを別個に分析すると、「もちろん」は上記の説明どおりの職能を担っていると思われるが、同文の内容が必ず、否定できぬ事実だということを読み手は知っておかなくてはならない。すると、副詞としての職能をみるのは少し無理が生じるのではないかと思う。従って、「もちろん」の接続機能の方が重視されるべきではないか、という考えである。十九世紀の英国の不平等な状態に対して、日本でも平等に関しては英国以上のものはなかったという二つの事実がある。後文は、意味的には、前文なしでは成り立たないので、これに対する依存度は高い。

④ さて、次の実例を見てみる。

「かくれんぼのとき、押入の真暗い中に、じっとしゃがんで隠れていて、突然、でこちゃんに、がらっと襖をあけられ、日の光がどっと来て、でこちゃんに、「みつけた！」と大声で言われて、まぶしき、それから、へんな間の悪さ、それから、胸がどきどきして、着物のまえを合わせたりして、ちょっと、てれくさく、押入から出て来て、急に無か無か腹立たしく、あの感じ、いや、ちがう、あの感じでもない、なんだか、もっとやりきれない。」(太宰治『女生徒』)

Monologue 調のこの短編小説の一文だけに、活用形の連用中止法、「手」形と接続詞「それから」による接続法がある。

「中止法が状況を軽く言いあげ、淡々と列挙的に叙述するのに対して、『手』形接続は、状況を明確にとらえて、けりをつけながら叙述するという傾向がある。また、中止法が書きことば的であり、『て』形接続が話しことば的である」(注4—pp.395)のが一般のだが、上の例文では、「て」と中止法が混用されている。しかし、話しことば的な文体であるため、「て」形が多用され、中止法は動詞に一回、形容詞に二回ある。これは、頻度が低いにもかかわらず、「て」形が頻用されている文中で、さっぱりした調子を文章全体にもたらず感じがする。接続詞「それから」は指示代名詞「それ」と助詞「から」で成り立つことから、前に述べた事柄から次の事柄へと視点を移す(注3—pp.227)という性質を持つ。が、この場合は、累加の意味を含んだつなぎの言葉にすぎない。

⑤ 日本語で接続機能のみを担う品詞(大久保整理の日本語品詞分類表に基づく)は接続詞と接続助詞である。木坂基はこれらを次のように区別している。

「接続詞と接続助詞とでは、前者が主として文同士の接続表現にかかわり、後者は文内語句の接続表現にかかわる。接続詞の使い方は、パラグラフの構成を特徴づけ、接続詞の一文の構成(文長の成立や叙述のテンポ、文内文脈の形成)を特徴づける。」(注4—pp.394)構文的には、接続詞は単独で一文節になり、接続助詞は単独で一文節にならない。又、次のような例文を上げてみると、

(1) 日本は火山が多い。だから温泉もたくさんある。

(2) 日本は火山が多いから温泉もたくさんある。

意味的には、「火山が多い」ことが理由・原因であり、「温泉もたくさんある」という事実が結果になっているのは、両例文で同じである。しかし、表現としては差異がみられる。前件「日本は火山が多い」をAとし、後件内容「温泉もたくさんある」をBとして説明を加えたい。(1)では一旦ピリオドを打って、AとBとの間は接続詞によって因果関係が保たれる。この場合、接続詞なしでただ文を重ねるだけでは、その関係が見失われる恐れがあると思う。「だから」は、従って、後件に結果としての役割を与える。距離と意味の関係を探るとすれば、接続詞「だから」はAよりBに接近していると思う。(2)例文では、接続助詞の機能、つまり、

「前件の表現を未完結のままにして、後件と関係づけ結び合わせるものである」(注2—pp. 553) ことからAと接続助詞は密接な関係であり、Bは必ずなくてはならない要素である。

ポルトガル語で接続機能をもっている品詞 (classe de vocábulo) はCONJUNÇÃO (英語のCONJUNCTION)である。これをEvanildo Becharaは次のように定義している。

"Conjunção é a expressão que liga orações ou, dentro da mesma oração, palavras que tenham o mesmo valor ou função"(注5)

すなわち、

「文節と文節又は文節内では構文的に対等した語を結ぶ語(または連語)」

となる。以上の定義で分かるように、Conjunção は日本語の接続しにも接続助詞にも相当する。ポルトガル語では助詞の概念がないため、接続助詞とは無関係だ、と思われるが、日本語の一つの文内の文節と文節の結びはこれによって行なわれることが多いので、ここで強調したいことは、ポルトガル語文法研究ではConjunção を文節と文節との接続語として重視しすぎ、文と文、段落と段落との接続語のConjunção の研究はあまりないことだ。すなわち、日本語の接続詞に相当するConjunção の研究は乏しい。

Conjunção は大きくCoordenativa (等位接続し)とSubordinativa (従位接続し)に分類する。その用法を少し説明してみる。

"Aos 59 anos, dois, filhos, dono de um salário de 7.800 cruzados novos no Senado Federal, Mário Covas tem um perfil daquele candidato que(a), a julgar pela numerologia dos institutos de pesquisa de opinião e(b) pelo estado de espírito atual dos eleitores, estaria predestinado a naufragar nas últimas colocações da sucessão do presidente Sarney.

Às 16 horas da quarta-feira da semana passada, contudo(c), ao subir a tribuna do Senado Federal para fazer o lançamento de sua candidatura através de um discurso de quarenta minutos, Mário Covas produziu algo inédito até agora na sucessão presidencial: um conjunto de idéias e(d), mais que isso, um conjunto de idéias de primeira qualidade."(VEJA誌—1989年07月05日)

上記の文章は二文と二段落で成り立ち、Conjunção が三つある。que(a)は名詞candidatoを修飾する文節 "estaria predestinado...presidente Sarney" を誘導する機能をもつ Conjunção subordinativa substantiva completiva nominalである。e(b)は、日本語の接続助詞「と」に相当し、"pela numerologia dos institutos de pesquisa de opinião"と "pelo estado de espírito atual dos eleitores" を接続している。e(d)は "mais que isso" (「それ以上に」のい)の前に位置し、ただの並立の接続詞ではなく前件の "conjunto de idéias"に説明を加えている。つまり、ただのconjunto de idéiasでなく、conjunto de idéias de primeira qualidade だったということを強調するのに用いている。さて、contudo(c)は接続の意をもつ等位接続し=conjunção coordenativa adversativa (「しかし」に相当する)だが、文節と文節ではなく、二つの段落の内容を接続する。その内容というのは、必ずしも逆接的な意味をもっていないので、接続しcontudo の役割は非常に大きい。

以上、ポルトガル語の接続機能を担うconjunção について説明を加えたが、それは日本語の接続詞と接続助詞に相当する場合もあれば、そうではないケースもあることがわかった。

(IV) 接続詞

(1) 接続詞の定義

日本語の接続語の内、接続詞に焦点を当てて本研究をすすめたが、その理由として次の点を特に上げたい。接続詞は接続機能を持つ一品詞としては、ポルトガル語の conjunção に一番近い。接続表現の対象としては、文あるいは段落のレベルのものを扱いたいのもその理由である。

国語学大辞典で接続詞について次のような定義になっている。

「構文論的に類別される品詞の一つ。単独で一文節を成し、二つ以上の語・句(文節・連文節)・文・段落(文章)、またはそれ相当の形式によって表現された叙述内容相互間を関係づけ、結び合わせる職能をもつ。すなわち、接続詞は、かならず先行の叙述内容(前件)をうけて、後行の叙述内容(後件)を先触れしつつ誘導する語詞で、前件と後件との関係の認定は、話し手の立場においてなされる。」(注2-pp.553)

この定義は井手至氏によるものだが、接続機能を具有し、構文論的な独立性を保持し、文の成分になる語のことを指している。品詞の一つとして扱っている。本稿では、この定義に基づき、又、昭和40年以降の文献を主に調べたので、「接続詞」という用語を用いてきたが、日本語学者の間で一品詞として完全に認められたわけではない。山田文法では「接続副詞」というように副詞の一種類として扱われ、「上下の語を連ね、または上の文句の意をうけて下の文句を修飾するもの」(注6-pp.

385)

と定義されている。鈴木一彦氏は、構文論上のレベルで、「句」として扱っている。その定義は次のとおりである。

「語と語、句と句、文と文、時に文章と文章を何らかの意で接続する機能を持つものに、接続句がある。一般には接続詞といわれ、語として扱われているが、これは具体的な表現の中で、常に接続機能を果たしているもので、そのまま、文の成分となる。従って、句の段階で扱うべきである。」(注6-pp.66)

接続詞を一品詞として設けることは洋文典にならったものらしいが、上記のように副詞とみる説の外、誘導語と考える説、又「辞」とみる説に、接続詞を二品詞に分ける説もあるが、これらの諸説をまとめ、それらの展開を調べたものが、井手至氏著の「接続詞とは何かー研究史・学説史の展望ー」(注7)である。本稿では、一般に使われる「接続詞」という用語を用いるが、それはもちろん、一品詞という説を受けとめ、ポルトガル語の *conjunção* に相当するとみただけである。

(2) 接続詞の発生とその特性

まず、「接続詞」という用語の誕生は近來のことで、それは19世紀初頭と推定され、和蘭文典や英文典などの訳語から出発し、大槻磐里氏が『和蘭接続詞考』に使い、その後普及したものと考えられる。

しかし、日本語研究史において、連接機能を有する語群が研究されるようになったのも「接続詞」という用語の誕生と時代をほぼ同じとする。接続詞の研究が遅かった理由の一つは、その語自体の発達が外の品詞より遅れたことと、又、日本の伝統的な文法研究の対象だった和歌や中古文に、接続詞があまり使用されていなかったことと同時に、伝統的な文法研究は語論、品詞論中心であったためだからである。接続詞は、文章論の上で、構文論上の問題なので、語論・品詞論から脱した近來の研究の対象になり、重視されるようになった、といえる。

接続詞は、発達が遅れただけでなく、本来のものはなく、外の品詞から転成したものが大部分である。その発達は近代日本語の論理表現の発達と一致するのではないだろうか。又、歴史が浅いにもかかわらず、現代の日本語の接続詞は、古代から現代までの各時代の接続詞がそのまま、史的変遷がなく残っているものである。従って、現代の接続詞は多様であると共に、その用法上の領域の分化も際立っている。

接続詞の文法的な性格を上げてみるが、それは次のとおりである。

まず、自立語で、活用がなく、単独で文節を成し、主語・述語・修飾語・被修飾語になることがなく、前の文法的単位(これは塚原鉄雄氏が使う用語)の内容をうけて、これを後にくる文法的単位に続け前後を示す(明確にするというべきである)語のことをいう。

現在、接続詞と認められる語は、その多くが外の品詞からの転成で生まれたものである

ことは上に述べた。例えば、指示語の「それ」に助詞がついた接続詞が多い。「それから」「それで」、「それでも」、「それなら」、「それに」など。

井手至氏が指摘しているように、接続詞は思考内容を明確に展開させようとする、話し手の立場の表現である。従って、立場の相違によって、同じ接続関係を示しても、その語句が変わることがある。又、文体の相違を示すため接続詞を使い分ける。

接続詞は、これを除いても論理の展開に支障を生じないことが多い。この特性を塚原鉄雄氏は、

「接続詞は、前件と後件との対応関係を規定する十分条件であるといえよう。十分条件であって必要条件でないところに、接続詞の存在性がある。」(注8-pp.15)

という。すると、この条件は接続詞の一つの特徴であって、副詞と異なる点でもある。例えば、

「十五番線の人ごみの中を、たしかにお時さんが歩いていた。その他所行きの支度といい手に持ったトランクといい、その列車にのる乗客の一人に違いなかった。とみ子もやっとそれを見つけて、

「まあ、お時さんが！」

と言った。

しかし、もっと彼女たちに意外だったことは、そのお時さんが、傍の若い男と親しうに話していることだった。」(松本清張『点と線』)

にみられる「しかし」は除いても意味的に不整がみられるとは思えない。この接続詞は西欧語のような逆接の論理関係を表さない。前件の内容を認め、後件ではそれに異なる事実を加えている感じがある。この例文の場合では、旅行準備をしたお時を東京駅で見かけたことが意外で(その意外性は「まあ、お時さんが！」の部分で分かる)あったが、それより意外だったのは、男と話をしている様子だったということを加えているようだが、それは「しかし」によって行われているのではない。

(3) 接続詞の分類

歴史上変遷の少なかった品詞なので、現在の接続詞は数も多く、種類も様々である。そのうえ、日本語文法学の世界で完全な市民権を持たないので、接続詞の分類も又様々である。従来分類を、用法と意味とを基準にしたものにまとめ、更に自己の分類を示した佐治圭三氏の「接続詞の分類」(『月刊文法』2の12、明治書院、昭和45年10月)と題した研究がある。同氏の分類が一番まとまっており分かりやすいものと思った。用法を基準にして、文の内がわに位置するものと、文の外がわに位置するものとし、構文論上に接続詞を大きな二グループに分けた。これは、接続詞がどのような文法上の性質をもった前項と後項を結びつけるかを考慮に入れたものである。更に、両項をどのような関係で結びつけるかを基準にし、意味的に分けている。

(4) 逆接表現の接続詞

佐治圭三氏の接続詞の分類を基に、逆接の意を表すものを取り上げ、分析し、ポルトガル語にそれらに相当する語を求め、更に実例を上げて用法を調べることにした。実例は、近代小説の中のものが主だが、接続の表現は文体に応じて様相を異にし、又、場面によって変容するので、別スタイルの文章の例の場合も考えることにした。

一言に逆接の接続詞といっても、その数は少なくないし、意味が全体に同じでもなく、又、それが似ていても、文章中での使い方が相違であることから、頻度が高く、一般的な接続詞を個別に、又は小グループに分けて分析する。

尚、分析は『基礎日本語2』（注3）によるところが多く、小説の実例は、「近代文学の接続語」で調査された諸小説を利用したので、あらかじめ記しておく。

①「しかし」、「しかしながら」

「しかしながら」は「しか+あり+ながら」から成り立ったもので、副詞として上代から使われていた。逆接の意味はもっていなかった。「しかし」という形が成り立ち、「しかしながら」も接続詞に転成したのは、中世から近世にかけての時期とされている。「しかし」が会話に、「しかしながら」が文章（当時にはくだけた文体のものに限られて使用されていた）に使い分けられ始めたのもこの時期で、現在では「しかし」は話し言葉（女性言葉ではない）としても、書き言葉としても広く使われている。「しかしながら」は、演説や論文のような固い文体に用いられている。

大正7年にでた有島武朗の小説には「然し」が16回用いられているのに対し、「然しながら」が1回でてくる。

「お前たちは遠慮なく私を踏台にして、高い遠い所に私を乗り越えて進まなければ間違っているのだ。然しながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にゐるか、或いはゐるかといふ事実は、永久にお前たちに必要なものだと私は思ふのだ。」（有島武朗『小さき者へ』）

この文章は小説の始めの段落で、父親が子供に話しかけているような調子の文体である。自分を踏台にし、乗り越えて進めという願いから、子供に自分より大きい存在になれと言わないばかりだが、後文ではそれよりなお大規模の、愛という存在があり、そのことを知らせなければならないと付け加えている。両件は対応関係にないので、接続詞は逆接の意味をもっていない。

「日本の大学（院）教育に対する一般的満足度は、このように数量的データに表われた限りではかなり高く、かつ自由記述意見のなかでも多くの留学生が、指導教授や大学の受け入れ体制にしばしば感謝の意を表明しているほどである。しかしながら、そのことは日本の大学（院）教育が、留学生にとって全く問題がないということの意味しない。」

(喜多村和之『大学教育の国際化—外からみた日本の大学』)

上の例文では、前文では程度を表わす「... ほどである。」調で文をしめくくり、当然こなければいけない結果ではなく、それを否定する文が続く。従って、「しかしながら」は、逆接の意味を担っているのだから、それを除くと、後文でいおうとしている、問題がある、という事実が弱まる。「しかしながら」はこのような論文、演説のようなレトリック的、固い文章に使われる。

「今日はいよいよ退院するといふ日は、霞の降る、寒い風のびゅうびゅうと吹く悪い日だったから、私は思ひ止まらせようとして、仕事をすますとすぐ病院に行って見た。然し病室は空っぽで、例の婆さんが、貰ったものやら、座蒲団やら、茶器やらを部屋の隅でござと始末してゐた。」(有島武朗—『小さき者へ』)

この部分の文章自体が論理的ではないのもあって、「然し」によって接続されている前文と後文の間には逆接の関係が示されていない。条件が悪いので妻の退院をとめようとした「私」は彼女がまだ入院しているものばかりと信じこんでいた。だから、「病室は空っぽだ」だったことは、そんな「私」に、突如、思ってもいなかった事実だった、という様子を表わしている。

「留学生にとって留学の成否を決定する最大の要因は、自分の研究目的に適した大学ないしは指導教授にめぐり会えるどうか、ということである。既に述べたように、全体的には適切な教授と環境の下に置かれているとの満足感の比率が高い。しかし他方では、個別的には厳しい批判や苦情も少なくない。」(喜多村和之著—『大学教育の国際化—外からみた日本の大学』)

ここでは、前件を述べた上で、それに対し反対の事実もあり、それを上げ、対照させている。

以上の二つの例文では、「しかし」の逆接の意味が弱い、或いはその意味さえないともいえる。次に上げるものは、接続詞が少ない新聞記事の中から、「しかし」が使われていた部分を例にしたものだ。

「地球環境問題のうち、オゾン層を破壊するフロンガス規制については既に『今世紀末までの全廃方針』が決められ、地球温暖化についても来秋以降条約づくりの作業に入ること各国の合意が得られている。しかし、熱帯林保護に関する対策が国際的な立場で具体的に論議されることはなく、事実上手づかずの状態となっている。」

(中国新聞—89年9月10日)

この場合も対比の「しかし」である。

これらの例のように、「しかし」は、一般的に広く、いろいろな文章に用いられる。それは、逆接の意味が際立っていないため、接続の関係も多様化されているのではないかと思う。

②「が」、「だが」

「が」は接続助詞「～が」から切り離され、独立して接続詞になったもので、これも逆接の意味の関係だけに限らず、対比、結果の関係をも示すことがある。使用頻度からいえば、文章に多いが、前文と続けてしまい、接続助詞にしてしまう傾向が目立つ。近代小説家の中では、芥川龍之介が好んで使う接続詞である。

「先生は、留学中、米国で結婚した。だから奥さんは、勿論、亜米利加人である。が、日本と日本人とを愛する事は、先生と少しも変りがない。」（『手巾』）

この文章での「が」は不可欠条件ではない。作家は、「奥さん」がアメリカ人である事と、そんな彼女の、日本と日本人に対する愛着感とは反対の関係であるとみせかけ、読者は「が」による接続関係という解釈に追い込まれそうになるが、実際にはそのような関係はない。

「だが」は、「が」に似たような意味関係を示すが、使用される範囲が広く、文章にも会話に用いられる。ただし、会話では、男性言葉になる。

「サクラ便りも、三月になると下旬頃から聞こえはじめる。花見といえばサクラ、百花のシンボルのようにサクラはなっている。だが、サクラは、バラやボタン、チューリップやスイセン、あるいはリンドウ、キキョウなどの花とくらべても、決してすぐれて美しいとはいえない。」（梅棹忠夫『日本人のこころ』）

この文章は、サクラが日本の代表的な花だということを前もって知らなければならない。だから、「百花のシンボルのようにサクラはなっている」ということを断定できる。シンボルだから、他の花と比べて「すぐれて美しく」なければならないと推測されるが、著者は、別の意見である。「百花のシンボル」にもかかわらず、他の花に比して「決してすぐれて美しい」とはおもっていないことだ。著者の価値観を基準にすれば、「だが」は逆接の意味関係で両件を接続している。

③「ところが」、「それなのに」、「しかるに」

「ところが」は前の文の内容から当然想像する方向と大はばに違うことを持ち出すときに用いる接続詞」（注3—pp. 334）で、逆接の意がはっきりしている。

「ある日僕は持っていたゴカイを使い果たしたものだから、常連から得た知識にしたがって、海中にざんぶと飛び込んで黒貝を採取しようとした。水面近くのは皆採り尽くしあるから、かなり深いところまでもぐらねばならない。苦勞して何度も潜り、やっと一握りの黒貝を採ったけれども、さて突堤に上ろうとすれば、誰かに手を引っぱって貰わねば上れない。ところが皆知らぬふりをして、釣りに熱中しているふりをよそおって誰も僕に進んで手を貸そうとして呉なかった。」（梅崎春生『突堤にて』）では、手を借

りないと上れないことは誰もが認める事実なので、「僕」が当然期待したのは助けてくれることだったが、無視された。しかし、「ところが」が使われるのは上記の例のように文の内容上の矛盾する場合でだけではない。

「かつて世界でもっとも大切な海は地中海といわれた時代がありました。その後もっとも大切な海は太平洋だといわれた時がありました。ところが、21世紀、この地球で、政治的にも経済的にも、もっとも重要な海は太平洋となるであろう、と予測されております。」（平川祐弘「日本文化の二面性」）このように、新な事態を持ち出す時にも用いられる。「ところが」の場合は前の内容と後の内容とは論理矛盾ないし意外性が大きい。

「それなのに」、「しかるに」も、前の文で述べたような成り行きがあるにも拘らず、それに反して、違う結果が生ずる場合に用いることでは「ところが」と同じ意である。しかし、上の例では、「それなのに」と置き換えができない。「それなのに」が話し言葉で、「しかるに」が書き言葉である。「それなのに」には話し手の未練のような気持ちが見られ、後の文の内容を認めたくない感じが残るようである。「それなのに」の助詞の部分の「へのに」が、「”前件がそのような事実であるにもかかわらず、あえて後件の事実である”という逆接ゆえ、後件を省略することによって、”前件の事実から予想し期待していたにもかかわらず”という期待はずれの事実に対する不満の気持ちを含めた言い方となる。なぜだろうという気持ちを伴う。」（注3 - pp. 384）からである。「しかるに」は文章にしか使用されない接続詞だが、文章中でも頻度が低い。多くの作家や随筆家は、同じ意味の外の接続詞を好んで使う。「しかるに」は固い表現である。

「「平等」の少くとも一面は、あきらかに内発的である。しかるに「自由」は、「自由民権」運動の歴史があり、「大正デモクラシー」の経験があったにもかかわらず、外発的な面が強く、内発的傾向としては確立されていなかった。」（加藤周一「自由と・または・平等」）「しかるに」に結ばれている事柄は共に現実のことに立脚した事実である。基本的には「内発的」であるが、事実上外発的な面が強くなってしまい、予想と反面した結果になったという内容である。

④「けれど」、「けれども」

「前の文の内容を認めつつ、同時に後に述べる事柄も共存することを表す」（注3 - pp 79）ので、前件と後件とが互いに矛盾する関係だとは限らない。「しかし」よりくだけた語だが、外の語群に比べると書き言葉の表現である。田山花袋は「一兵卒」で、「であるのに」を一回使っただけで、逆接関係はほとんど「けれど」「けれども」を用いている。戦場の描写と、一人の兵卒の心理描写が豊かな作品で、論理的逆接関係を示す「しかし」は使われていない。三人称によるナレーションだが、様子、意見は兵卒の立場に基づき、「兵卒」の行動を追って文章は進展する。

「満州の野は荒漠として何も無い。畑にはもう熟し懸けた高粱が連って居るばかりだ。けれど新鮮な空気がある、日の光がある、雲がある、山がある、—」前文と後文の内容は矛盾していない。ある視点からは、満州は悲惨な所だということが判断されるが、外の視点から考えると、新鮮な空気、日の光、雲、山があるので、二つの条件が共存することを接続詞「けれど」で結ぶことによって示されている。

⑤「にもかかわらず」

「それにもかかわらず」の言い方も使われる。意味は、「前の状況から当然想像される結果に反する事柄が続く」（注3—pp. 379）といった逆接の接続詞。固い文章に使われる。

「だが此の私ひとりにとって明瞭なこともどこまでが現実として明瞭なことなのかどこまでどうして計ることができるのであらう。それにも拘らず私たちの間には一切が明瞭に分っているかのごとき見えざる機械が絶えず私たちを計って来てその計ったままにまた私たちを押し進めてくれてくるのである。」（横光利一『機械』）「私たち」はどこまでが現実として明瞭か計ることができないという前文の疑問があるのに、機械はその私たちを確かに計っている、という意味であらう。

「留学生の日本の大学院教育にたいする評価は、かれらが置かれた環境や条件によって大きく左右されると思われるが、それにも拘らず、留学生は共通する幾多の問題を指摘している。」（喜多村和之『大学教育の国際化—外からみた日本の大学』）

この例文では接続助詞「～が」と伴った「それにも拘らず」の用法のように、文中にも使われる。「環境や条件」によって評価は異なるが、留学生がそれとは別に、共通の意見を持っている、という意味に受け取るべきあらう。

⑥「でも」、「それでも」、「それにしても」、「それにしては」

「でも」は断定の助詞の「だ」から成り立っているのだから、前のぶんの内容を認め、それに対する事柄や事実を自分の意見として出す接続詞だが、文章には使わない。

「それでも」の「それ」の部分は前件の内容を受け、後に逆接の意味になる内容を述べる。

「その中に、ものを蕩かして水と化する此の器の力で、悟空の臀部の方がそろそろ柔らかくなり始めたが、それでも彼は唯妖怪に捕らへられた師父の身の上ばかりを氣遣っているらしい。」（中島敦『悟浄嘆異』）

「それにしても」と「それにしては」の形もある。「前件である程度予知できた事態と現状とを比較して、”予想はしていたもの、それ以上に”というプラスにさらにプラス

される極端な状況である」(注3-pp.328)「それにしても」にたいして、「それにしても」は、「予知した事態と現状とが逆の状態にあるため、プラスにマイナスされる状況である。(注3-pp.328)

「戦後の混乱の時期には、正月の伝承行事も、中絶、あるいは衰退していたが、世の中の安定とともに、次第に復活して、年ごとに盛大になってきている。しかし、これをもって「神国思想の復活」などと目くじら立てることはない。正月行事に必要な品々を売らんがための商魂が、最も大きな原因である。コマースリズムによる正月市場再発見だ。

それにしても、一家をあげてのモチツキ、あせち料理作りの徹夜作業は昔のこと、いまはデパートへ行けばすべて売っている。神参りも、陸、海、空の交通産業が大サービスで、国内の神々どころか、香港やハワイの日の出も自由におがめるのである。」(梅棹忠夫他著『日本人のこころ-文化未来学への試み』)に使用されている「それにしても」はこの二つの段落を繋いでいる。著者は前件の内容を事実として認めるが、後の段落では更に現状を詳しく説明しているように思うし、表現としては、驚きがみられる。お正月の行事が商売化されたのは事実で、それは認めるが、その程度は予想以上だった、と驚倒している。

(V) おわりに

本稿では日本語の接続表現を取り上げ、そのいろいろな表現形式をポルトガル語と比較しながら、接続詞にしぼって研究を進めた。この接続詞については、主な定義を引用し、品詞論上の意見が異なるので、諸説を参考にまとめた。

同じグループの接続詞でも、意味が微妙に異なる。この研究の本来の目的は、その差異を分析し、用法を実例の上に求め、更にポルトガル語を母国語とする者が、日本語の接続詞を適当に使いこなせるように、conjuncao と比較し、その用法を規則づけることだった。小論では逆接の接続詞にしぼって分析してみたが、必ずしも明確な規則性は発見できなかった。

この考察によって日本語学習者が接続詞を意味的に正確に使いこなすようになることはもちろんのこと、文体の相違によって接続詞を選ぶようになって、初めて、日本語の接続詞の用法を把握できた、といえる。しかし、ここには問題点が一つある。接続詞は、文章の意味を明確にするために使われる語である。すなわち、十分条件を満たす語であって、必要条件を満たす語ではない。話し手(書き手)の立場のもで、かなり主観的なのである。従って、文章の中で接続詞を考える時、前件と後件とをつなぐ語の分析を行った後に、それに基づいて両件の関係を求めるのか、両件の意味を分析した後に接続詞が果たしている機能を探るのか、迷うことが多い。

話し言葉か書き言葉か、論理関係をはっきり示す(条件を表す接続詞の場合)かどうか、

あらたまった形式の文章に用いるのか、くだけた形式のものか、というように、文体の相違を基準に接続詞を使い分けるようになれるためには、今の段階では、多くの例文を上げてその用法を把握するしかないだろう。

なお、日本語の接続詞の用法を、文章スタイルの上で研究することは今後の課題としたい。

(注)

1. 森田良行 「文の接続と接続語」『日本語学』、明治書院、昭和62年9月
2. 国語学会 『国語学大辞典』、東京堂出版、昭和63年
3. 森田良行 『基礎日本語2』、角川書店、昭和63年
4. 木坂基 「近代小説の接続語」『近代文章成立の諸相』、和泉書院、第5章第1節、昭和63年
5. Bechara, Evanildo. Moderna Gramatica Portuguesa, Sao Paulo, Cia. Editora Nacional, 1.987
6. 松村明編 『日本文法大辞典』、明治書院、昭和63年
7. 井手至「接続詞とは何かー研究史・学説史の展望」『品詞別文法講座6 接続詞』、明治書院、昭和48年